静岡県で活躍する医師

小さな命の糸をつむぐ若きスペシャリスト

順天堂大学医学部附属静岡病院（新生児科 助教）

大川 夏紀 先生

Dr.Natsuki Okawa

新生児科ほど守備範囲の広い診療科はないのかもしれない。小児科と同じく内科・外科の両面を併せ持ち。臓器別にセグメントされているわけでもない。まさに 50cm（場合によりさらに小さい）にも満たない命そのものが守備範囲となる。

また性質上、救急医療の側面がとても強い。横断的な知識とすばやい判断力も必要だ。周産期（妊娠 22 週から出生後 7 日未満）における医療を、言い換えれば日本のこどもたちの未来を産婦人科の医師と一緒に切り拓く医師たちである。

活躍の場は、NICU（新生児集中治療室）や MFICU（母体胎児集中治療室）が設置されている若しくは同等の設備がある総合周産期医療センターや地域周産期医療センターという三次医療機関が中心となる。 その中にあって、産婦人科と同様に新生児科の医師も不足している。必要とされながらも、大学病院を含め全国的に医師が充足している施設はほとんどないだろう。

主観を交えることになるがなるが、それでも新生児科や産婦人科の医師は明るい医師がとても多い。

今回は静岡県東部の医療の砦、順天堂大学医学部附属静岡病院の新生児センター助教、大川夏紀先生にお話をうかがった。

卒後１５年で総合母子医療センターの新生児部門を牽引する若きリーダーである。

4センチの掌が医師の手を探る
無垢なる存在に愛をもって・・・
さあ一緒に頑張ろうね

私の両親はともに医師でした。父は消化器外科医、母は産婦人科医です。幼い頃は両親のタフな生活をまじかで見ていたので医師になりたいとは思っていなかったです。けれど、いざ進路を考えはじめると医師という仕事しか思い浮かばなかった自分がいました。その後、千葉市の自宅からも近かったこともあり順天堂大学に進学しました。高校生の頃はバスケット部に所属し、熱心に活動していたこともあり、本格的に受験勉強を開始したのが3年生からでしたから1年浪人をしました。

大学に入学してからは軽い気持ちでライフセービング部に入りました。ビーチフラッグなどのイメージが強かったのですが、海難救助を目的とした硬派な部活で夏はずっと海でパトロールを実施していました。実際、溺れかけた女性を救助したこともあります。

さて、新生児科に進んだ理由ですが、両親ともにメスを持つ科の医師でしたから、自然と外科系に魅かれていきました。新生児科に出会ったのは、まず最初のポリクリが新生児センターだったことが影響しています。それまでの可愛いこどもたちが患者さんというイメージとは一線を画した緊張感の高い現場の雰囲気に魅入られました。その後、小児科、産婦人科、小児外科をまわり、三科ともに周産期のカンファレンスにあたりました。これから産まれてくる赤ちゃんについて、各科がどう役割分担をし対処するかというミーティングに大きな興味をもったのです。

なんでも率直にお答えくださる大川先生　そこには葛藤も…

当時、もうひとつ魅かれていた科がありました。乳腺外科です。科を率いておられた女性の医師に憧れ、新生児科とどちらにする悩んでいたのです。そして、ついに締め切り日を迎えた私は、その日の気分に任せて新生児科にすすむことになったのです。

よく後輩に話すのですが、「考えに考えて二択三択まで絞ったのなら、どこに進んでも楽しいし、多少の後悔もあるよ」と、迷いがある方は、自分を信じて決めればよいと思います。

医師としてのデビュー

卒業後は順天堂大学の小児科に入局し、血液や循環器などひと通りの科をローテートしました。そして2年目になったころ、欠員がでたこともあり、この静岡病院に派遣されたのです。この頃の当院はまさに野戦病院で仕事もハード、指導もハードでした。時代だと思います。その後、現在の東京ベイ・浦安市川医療センターでも鍛えられ、卒後6年目に当院へ戻って来ました。この2年間は、激務でしたが医師としての礎は築けたと思います。ちなみに当時の当直回数は月十回を数えたと思います。もちろん今は違いますよ。

まだ目が開かずとも大川先生の手をしっかりと探る小さな手

新生児センターのありのまま

現在勤務している新生児センターについてご紹介します。総合周産期センターというと何処でも症状の重い赤ちゃんが集まっているという認識ですが、当院のある静岡県東部は基幹となる病院が少なく、実質、静岡県の3分の1の地域の赤ちゃんを当院で診ているといっても過言ではありません。それも一次から三次までを幅広く見ています。そして、その業務量に比べて医師が多いとは言えません。延べ8名体制です。また比較的、若い新生児科の医師たちが支えていることも特徴です。2003年卒の私の直属の上司がセンター長の寒竹先生ですから、その年齢構成は想像がつくかと思います。とにかく無我夢中で新生児の救命をやってきたという感じです。その甲斐もあって、受け入れ患者数は延び続け毎年400〜450名の新生児を受け入れており、症例数に困るようなことは皆無です。忙しいですが、短期間で一人前の新生児科医になれると思います。

新生児の成長はとてつもなく早い…　日々、観察が必要です

やりがいとモチベーション

私は千葉県出身ですが、静岡に10年もいると地域そのものに愛着が出てきます。院内では人と人との繋がりもでき、また近隣の先生方とも仲良くなり、ささえていただいています。ここで頑張ろうという気になります。

そしてもうひとつ、病院が新しいことをすることに、とても理解を示してくれる点です。これは大きなモチベーションになっています。先程もお話したように新生児センターは若い医師が大半を占めています。学会参加や論文などを通して目新しいことに貪欲です。少し前のことですが「脳低体温療法」を導入しました。これに必要な機器の購入や安全管理、医師の教育など新しいことにはそれなりの準備と労力がかかります。にも関わらず、院長をはじめ幹部の先生方に理解を示していただき、比較的短かい期間で予算を組んでいただきました。大学の附属病院という大きな組織の中ではめずらしいことだと思います。

一緒に走ってきた寒竹センター長の研究室にて

お母さんと一緒に生後1日の赤ちゃんを観察します。状態のご説明も大切な業務です。

今後のビジョン

どの科もそうですが、新生児科でも全ての患者さんが元気に退院されるわけではありません。ですから、今後は在宅医療を強化する仕組みを構築できればと考えています。静岡県西部では比較的すすんでいますが、広域にまたがる東部では遅れてます。具体的には、リハビリ施設やショートステイ、もちろん開業医の先生方とのさらなる連携もそうです。また、東部の新生児を受け入れを他院の先生方と協力して当院に集中しないようにできればと考えています。東部は広域ですからご家族の負担などを考慮すると、この方が良いと思っています。

最後に若手の育成です。新生児科医はファーストタッチした赤ちゃん全てをマイベビーだと感じ、愛情をもって診られるという楽しみがあります。それは、まさに無垢なる存在だからであり、私たち医師もまた人間だからです。

一緒に愛を注ぐ仲間の登場を期待しています。

若い医師が多く賑やかな新生児科の医局　研修医も来て雑談にも花が咲く

若手医師へのメッセージ

年数百名の赤ちゃんを受け入れていますが誰ひとりとして同じ子はいません。みんな等しく可愛く素敵な存在で、仕事が忙しくてもこどもたちが癒してくれます。是非、新生児科の門戸を叩いてみてください。初期臨床研修病院でもある当院は見学も融通が利きますよ。

●略歴

1977年	千葉県生まれ　2003年　順天堂大学卒業
2003年	順天堂大学医学部小児科学講座 医員
2003年	同大学本院、静岡病院にて研修
2004年	東京ベイ・浦安市川医療センター 新生児科
2005年	順天堂大学医学部附属静岡病院　医員
2009年	順天堂大学大学院医学研究科卒業
2009年	順天堂大学医学部附属静岡病院　医員
2012年	同、新生児科　助教

●取材を終えて

静岡県内で3箇所しかない総合周産期母子医療センターの現場を引っ張る若き医師。　その物腰のやわらかさに驚かされました。
なんでも率直で、とても気さく。笑顔のはじける女医さんです。　小児医療に興味のある方は、是非、大川先生とお話してみてください。
みなさんの進路に大きく作用するかもしれない「小さな命を救い守るべく最前線でたたかう新生児科医の本音」が聞けるかもしれません。